

このひと



薬物依存者を 疎外する社会で、 仲間とともに生きる

くら た
倉田 めばさん

ピア・ドラッグ・カウンセラー
NPO法人大阪ダルクセンター長、Freedomコーディネーター

30歳までに4回の入退院を繰り返す

昨年は芸能人の薬物使用が大々的に報道された。ピア・ドラッグ・カウンセラーの倉田めばさんは、「マスコミの報道は犯罪的です」と言い切る。

「注射器や白い粉の映像を繰り返し流しますが、薬物依存症の人はそうした映像によって薬物への渴望をかき立てられ、薬物使用に走ってしまうことがあるんです。報道によって“スイッチ”が入ってしまった人は少なくないでしょう」

倉田さんの言葉は脅しではない。肩書きにピア（仲間）とあるように、倉田さん自身も長い間薬物依存に苦しみ、回復してきた人である。

14歳でシンナーを吸い始め、シンナー依存で3回、病院で処方される睡眠薬や安定剤などのクスリ依存で1回の入院をした。30歳で4回目の入院をした時、勧められてアルコール依存症の人のための回復施設に通い始める。当時は薬物依存症のための施設がなかったのである。そしてようやくゆるやかな回復へと向かい始めた倉田さんに、「大阪でダルクを立ち上げないか」と声がかかった。ダルクとは、1985年に東京で創設された「薬物依存症から回復して社会復帰を目指すための民間リハビリ施設」である。

いったんレッテルを貼られると一生疎外される

「自分には対人援助の仕事は向いていない」と断った倉田さんだが、ある時、転機が訪れる。ダルクの施設長たちが計画したスペインとイタリアの施設の視察旅行に同行した時のこと。「若者が薬物を使うのは社会や地域の責任。彼らが立ち直って社会に戻ってくるのを手助けするのは当たり前のことです」と語ったイタリアの施設長の言葉に大きな感銘を受けた。「日本ではいったん薬物依存というレッテルを貼られると、一生、社会から疎外されます。回復する権利を奪われているといってもいい。

違う世界どころか違う惑星ぐらいの開きをまざまざと見せつけられて、怒りに近い感情を抱きました」

仕事の都合で面会を延期した依存症患者が急死するという出来事も決意の後押しとなった。1993年、順調だったカメラマンの仕事をやめ、たった一人で大阪ダルクを立ち上げる。入所者のグループワークをし、家族の相談を受けながら、資金集めに奔走した。「2年でバーンアウト(燃え尽き)して、あとは余力でやってます」と笑うが、ダルクで回復した人がスタッフとして活動を支える側に回るなど少しずつ人が増えてきた。2006年にNPO法人を取得、現在は1つの通所施設と3つの入所施設を運営する。外郭団体のFreedomでは当事者の回復に向けた活動の他、薬物依存者の家族への支援もおこなっている。

希望がもてることが回復へのステップになる

ダルクのプログラムの最大のスローガンは「今日一日だけ」である。明日はクスリを使ってもいい。でも今日だけはやめよう。そうやってクスリを使わない日を1日1日と積み重ねていく。倉田さんはこの考え方に救われ、アルコール依存の回復施設で出会った仲間たちに受け入れられるなかで回復してきた。「薬物依存は死に至る病です。でも説教や指導では治らない。クスリをやめればいいことがあるという希望がもてることが何よりも大事で必要なんです」

薬物にはまる人はこれからも増え続けると倉田さんは話す。非難し排除し続けるのは、社会にとって決して賢明なやり方ではない。

大阪DARC(ダルク)

TEL/FAX : 06-6323-8910

E-mail : osakadarc@gmail.com

Freedom(フリーダム)

TEL/FAX : 06-6320-1463

E-mail : addict@yo.rim.or.jp